

食に関する情報が氾濫する中で、医療従事者には、正しい知識をもち、何が健康のために本当によいのかを判断する能力が求められている。そのためには、栄養学の基礎を理解しなければならない。学習の上では、覚えることが多く大変と感じる部分であろうが、臨床で応用する場合に不可欠となる基礎知識については、学習を避けるわけにはいかない。本書では「臨床栄養学の基礎知識」として第1章にまとめ、図表を多く用い、わかりやすく学べるように工夫した。第2章では「日本人の食事摂取基準（2015年版）」について取り上げた。

第3章以降は、対象者の健康の段階に合わせて、栄養学の基礎知識を踏まえ、実際の対象者にどのように応用していくのかについて述べた。臨床栄養学における健康の維持増進に関わる項目を「日常生活と栄養」として第3章に、健康障害の治療に関わる項目を第4章「療養生活と栄養」、第5章「疾患別の食事療法」にまとめた。第6章では、これからますます重要視される「食事指導の実際」について説明した。

このように、臨床栄養学に必要な知識がもれることのないよう、テキストを構成した。また、学生が知識を積み上げ、統合しながら学習できるように、学習する段階に沿って項目を配置するように工夫した。

さらに、本文の用語説明や関連事項を補足するplus α を有効に配置し、本書だけで十分理解が得られるように多用した。本書では、各章の学習項目ごとに、該当分野の専門家に執筆を担当してもらうことにより、最新の栄養学の中から学生にとって必要な内容を精選し、理解しやすい記述で説明することができたと考えている。本書で学習する主な対象は看護学生であるが、看護以外の医療従事者を目指す学生および医療従事者にも十分に役立てていただけるものと思う。広く、臨床栄養学を学ぶ人にとってのテキストとして利用されることを願うものである。

終わりに、本書の執筆にあたりご助言およびご協力をいただいた方々に深く感謝いたします。

神戸大学大学院保健学研究科教授
關戸 啓子